



レヴィ=ストロース先生が2歳のころの肖像画の下で(川田順造撮影)

この一月、構造人類学の祖クロード・レヴィ=ストロースが100歳の誕生日を迎える。その慧眼は「未開社会」の神話や親族組織に、近代西欧の科学的思考に劣らない感性的表現による世界の組織化と活用があることを見出し、20世紀の人類を理性中心主義の呪縛から解き放った。

日本でも一九七〇年代、八〇年代には思想界、文学界を巻き込んだレヴィ=ストロース旋風が起こったが、その名は今や時代遅れの化石と化してしまった感がある。しかし彼の著作から学ぶべきことは、まだまだあるのではなからうか。

現代の知の巨人の生誕100年を記念して、レヴィ=ストロースの一世紀を振り返り、その理論が残した痕跡、およびその思想の今日における意味を探る。



民博における1977年10月20日の研究会風景

## こぼれ話、レヴィ=ストロース先生

川田 順造

(かわだ じゅんぞう)

神奈川県日本常民文化研究所客員研究員

### クロード坊やと七六年後の先生

レヴィ=ストロース先生が、ジバンでソファアに座った右頁の写真は、わたしの秘蔵の一枚だ。一九八六年七月、葡萄酒の名産地ブルゴーニュにある、先生の別荘のサロンで、壁に掛かっている油絵は、先生が二歳のとき、祖母の膝で本を広げている姿を、肖像画家だった父上が描いたものだ。先生の別荘に妻と娘と三人、何日か泊まりがけでお招きいただいたとき、そう伺ってわたしは、この絵の下で、本を広げて下さいとお願した。茶目好きの先生は、喜んで応じて下さり、このショットとなった。

二〇〇四年にパリのレルヌ社から刊行された、先生の未発表の文章や、先生についての世界の四八人の論文、詳しい年譜

### ウマびごき

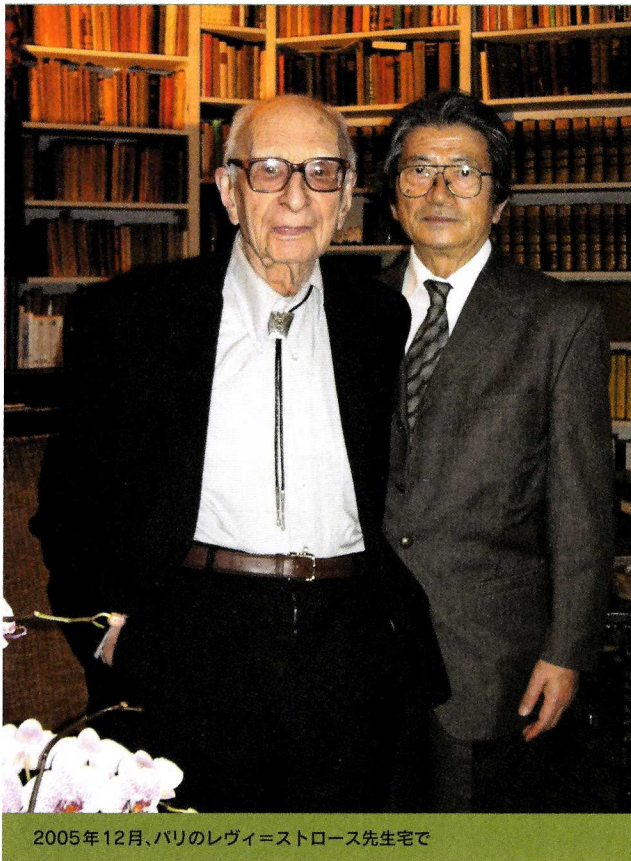
『悲しき熱帯』に描かれた、ブラジル奥地での生活のありさまを読んでも、先生がいかに、強い好奇心と食欲をもっておられることがうかがえる。日本で食事をご一緒したときも、コイの洗い、丸のドジョウ鍋など、おいしそつに召し上がるのに驚いた。そんな先生があるとき、「わたしが日本で食べられなかった、ただひとつのものは何だかわかりますか？」と言われた。答えられずにいると、「馬肉料理ですよ。ヴェルサイユのブルジョワの家庭に育ったので、ウマは高貴な動物だという観念がしみついているからですと、文化相対主義にちよつと謎をかけるようなお話だった。

それがきっかけになって、フランスでわたしがよく食べた生の馬肉の「タルタル・ステーキ」(かつてパリ・モンパルナスの「クーパー」で、当時はこの店の名物だったこの料理を今西錦司先生と食べたとき、今西先生は「こんなうまいもん、はじめて食った。この辺から汗が出て来た」と鼻の脇を指さして相手を崩された)をはじめ、世界の馬肉食をめぐって、レヴィ=ストロース先生とは何度もお話しした。ウマびいきの先生は、フランスではパリ・コミュニケーションで、食べるものに困窮したときからではないかとも言われたが、フランスでも馬肉食はもつと

古く、広いようだ。

別荘では、書斎の机の引き出しを開けて、護身用のピストルがあるのを見せて下さったことも思い出す。

まもなく満一〇〇歳を迎えられる先生は、先月下さった、封筒の宛名までいつもながら万年筆での几帳面な手書きのお手紙にも、「手が震えて、字がうまく書けずもどかしい」ときちんとした字でお書きになっていた。もどかしさを自覚されて、もどかしいとききちんとした字でお書きになる先生は、まだまだお元気だ。



2005年12月、パリのレヴィ=ストロース先生宅で

# 『神話論理』の「反言語論的転回」

渡辺 公三  
(わたなべ こうそう)

立命館大学大学院教授

## 神話の言葉の逆説

言葉の獲得がヒトと他の生物との一線を画した、といえは誰も異論をはさまないだろう。しかし、そうしてヒトが語りだした初発の言葉である神話は、言語の哲学的分析には収まりきらない逆説をはらんでいる。レヴィ=ストロースの『神話論理』(全四巻)はそこ主張しているように思える。分析された神話群には動物たちがひしめき、さまざまな植物がிரりみだれて繁茂している。このあまりにも豊かな自然のなかに産まれおちた原初のヒトは、ジャガーから火を与えられたかと思えば、食べ物を惜しんだために、タバコの魔力によって美味しいノブタに変えられ、あるときはオジであるカワウソに助けられ、

巨大な男根のバクに妻を寝取られ、迷子の祖父母は歯のないアリクイになる。神話は一人の姿と動物の姿のあいだでどのようなにも変えられた時代に起こったことの物語であり、ヒトだけが言語を独占してしまい、レヴィ=ストロース流に言えば、動物とヒトの「連続性」が失われ意識疎通できなくなる以前への郷愁とそこにはもうもどれないという断念を含んでいる。しかしこれは神話という言語の逆説の起点にすぎない。

## 響きあう世界

多種多様な動植物は、種ごとの個性的な行動とかたちと性質を、ヒトがこの世界で生きる条件を理解する思考の手段として提供する。樹上で絶え間なく排泄するホエザルと、冷気を感じる樹をおりて決まった場所に排泄するナマケモノは生理的な短い周期と長い周期の対比を教え、寒くなると刺繍に最適で立派な針を提供するヤマアラシは冬の到来と季節の周期性を教える。鳥たちは生息場所の違いによって上中下や水辺とサバンナといった空間の分節を教え、腐臭のするオボツサムはかつて夜が支配していた死と腐敗の世界を教え、人間が永遠の生を享受できないことを教える。連続と不連続、周期性、

不可逆性さらには順序の構造や推移性といった高度に抽象的な思考の操作もまた、言語の分析でえられる概念ではなく、神話の語る動植物や天体の行動のなかに重層的に構造化されている。こうした構造が織りなされ、地上に生きるヒトの現実が何故こうあるのかを説き明かしたのが神話なのだ。

だからヒトの思考がどう成り立つかは、言語が世界をどう切り取るかという分析の問いではない。答えは言語の手前あるいは向こうの、五感を通じて知覚された世界の豊かさを語る神話から聴き取られる。「音楽でも、旋律と和声リズムと音色という四つの要素のうち、たとえば旋律に気を配ったときに和声が消えるかというところ、そんなことはなくて……四つの要素が絶えず……渾然一体となった全体の「響き」として聴いて\*」というように、原初の言葉としての神話は重層的な構造をそなえた「音楽」として聴き取られる。  
\*音楽を考ふる「茂木健一郎」江村哲二「ちくまプリマー新書」

こうしたレヴィ=ストロースの探究は一九五〇年代に始まった。だとすれば、それは二〇世紀後半の「言語論的転回」に先回りして「反言語論的転回」を達成していたといえないだろうか。今、わたしはそうした探究の端緒を見きわめたいと考えている。



2005年、フランス・ブラジル年に開催されたブラジル・インディアン展のカタログから。レヴィ=ストロースによる調査も回顧された

# 熱いは冷たい、冷たいは熱い

出口 顯  
(でぐち あきら)

島根大学教授

## 「熱い社会」「冷たい社会」

レヴィ=ストロースの、今ではもう忘却の彼方にあるかもしれない類型概念に、「熱い社会」と「冷たい社会」がある。前者は、近代文明社会のように、階層化や分業が進み、あらたな出来事が絶えず生成する変動やまじい社会のことである。一方後者は、どこまでもはじめの状態のなかに自分を保つとする、進歩も歴史もないように見える社会、つまり「歴史的気温」が零に近い社会である。

もちろんこれはあくまで理論的なもので、正確にどちらか一方にあてはまる具体的な社会など存在しないとレヴィ=ストロースは注意を喚起し

ている。「冷たい社会」の代表例のように思われる「未開社会」といえども、全く変化に背をむけていたわけではない。逆もまた真なりで、欧米と同じく文明国・先進国で長い歴史をもつ「熱い社会」に日本は属するように見えるが、「未開社会」に類似した呪術や民間信仰が今なお息づいていもいる。

## 他者理解の姿勢

だから「熱い」とみなされる社会と「冷たい」とみなされる社会の違いは、乗り越えられることのない絶対的なものではない。「熱さ」と「冷たさ」の配分の違いが、それぞれの社会で異なっているだけなのである。このことは、言語・慣習などが異質で遠くかけ離れているために、偏見や好奇のまなざしで見つめてしまいがちな他者の立場に、もしかししたら「われわれ」も身をおいていたかもしれないと反省する契機を促してくれる。レヴィ=ストロースがその著『神話論理』などで取りあげた南北アメリカ大陸の先住民は、まさにそのような開かれた態度で、他者を受け入れようとした。

グローバル化という現象と裏腹に、ますます他者理解が困難で混迷を極める今だからこそ、新大陸先住民の神話

新宿の京王デパートの屋上(「熱い」)に建てられた京王龍神(「冷たい」)  
(提供:中牧弘允)



ライフル(「熱い」)をもった北米先住民(「冷たい」)  
The Manners, Customs, And Condition Of The North American Indians George Cathlin

に他者への配慮の倫理的姿勢を読み取ろうとしたレヴィ=ストロースに、学ぶべきことは大きいはずである。しかし、かつてアングロサクソンの人類学者は、彼の著作を丹念に読まないまま、「熱い社会」とは西洋の文明社会のこ

とで、「冷たい社会」とは「未開社会」とたとえレヴィ=ストロースが述べていると批判してきた。わたしたちも、それを鵜呑みにしてレヴィ=ストロースという「他者」を忘却していった。まずは、この過去を反省すべきかもしれない。



## 特集 今日のレヴィ=ストロース

# ブリコラージュとアート論

竹沢 尚一郎  
(たけざわ しょういちろう)

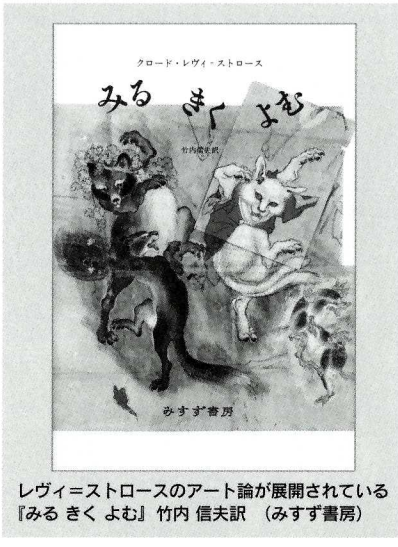
本館民族文化研究部

「惻かな理論家」のイメージのあるレヴィ=ストロースだが、絵画や音楽について好んで語る一面もある。アートと政治について語りたがるのはフランス人の習性だが、その一例かといえどもでもないらしい。父親が画家で、曾祖父が宮廷のオーケストラ指揮者だったという出自を見れば、アートへの関心は生まれついていたものなのだろう。

『遠近の回想』を読むと、亡命していたニューヨークで、アンドレ・ブルトンをはじめとするシュルレアリスムの面々と交流があったことがうかがえて興味深い。たしかに両者のあいだには、無意識への関心や、感性と知性の統合、「未開芸術」への関心など、重要な要素がいくつもあつた。両者が交わつたのは当然であつた。彼が『野生の思考』のなかで理論化し、その後神話分析の基本にした概念にブリコラージュがある。ブリコラージュとは、板の破片や布の切れ端など、手近な材料を用いて仕事するアマチュア作家の作業をいう。神話や動植物の分類などにも、それと共通する特徴があるというのだ。

ブリコラージュの特質は、その素材がかたちゃ色、それがアート論に適用されたのは必然であつた。アートとは、色彩や形態、メロディーなどの感覚特性を組み合わせて作られる一全体である。それを読み解くには、感覚特性の対比を中心にその論理を読み解くことが必要だというのだ。

このアート論は興味深いが、神話論ほどには魅力的でないのはなぜか。神話は無意識的な営為の産物なので、そこに一貫した論理を読み込むことには意味があつた。しかし、すでに当事者の解釈を含んで成立しているアートのうちに、感覚特性の対立を認めるだけでは単純すぎるだろう。彼のアート論の限界は、構造主義の現代世界への適用の限界でもあるように思うのだ。



レヴィ=ストロースのアート論が展開されている『みる きく よむ』竹内 信夫訳 (みすず書房)

# 民博にきたレヴィ=ストロース

中牧 弘允  
(なかまき ひろちか)

本館民族文化研究部

レヴィ=ストロースがはじめて民博にきたのは一九七七年一月二〇日、開館を一月後にひかえていたときのことである。当時の『月刊みんぱく』によると、午前中は梅棹忠夫館長の案内で館内を見学し、午後はレヴィ=ストロースの要望で「日本文化における労働に関する観念」をめぐる研究会が開催され(二頁左下の写真)、博物館の研究者と活発な意見交換がなされ、そのあと歓迎パーティーが開かれた。とある。また、「この博物館は、施設・内容ともに世界最高の民族学博物館であることを確信します」との感想が寄せられている。

午後の研究会では若輩のわたしも列席をけがした。気難しい顔をしたレヴィ=ストロースがカバンをいじりながら日本での研究の目的を語り、ちよつと離れて奥様がすわつていた。通訳をしたのは『野生の思考』の翻訳者でもある大橋保夫氏(京大教授)だつた。わたしにも順番がまわつてきたとき、天理教の「ひのきしん」(宗教的奉仕活動)や同教団の初期の指導者飯降伊蔵が大工だつたことをとりあげ、日本における労働観の一端を語つた。



表はレヴィ=ストロースの顔のレリーフ。裏は野生のパンジーから構造体をとる少女。紋章は北米先住民に由来する



夜のパーティーは四階の特別研究室で開かれ、多くの館員が参加した。そこで印象に残っているのは、レヴィ=ストロースが自分の立場は構造主義ではないと強く否定していたことである。つまり、イイズム(主義)ではなく、構造的な見方をしているにすぎないのだ、ときつぱり述べていた。

一九八〇年の春にもレヴィ=ストロースは来館しているが、特別な歓迎会は開かれなかった。ただし、彼がフランスのアカデミー入りした際に友人たちに配つた記念メダル(写真)を当時の梅棹館長に手渡ししている。同時に、コレージュ・ド・フランスでの連続講義を依頼し、それは一九八四年に実現している。聞けば、アカデミー・フランセーズの会員で一〇〇歳を越えるのはレヴィ=ストロースがはじめてだそう。民博の初代館長にもレヴィ=ストロースにあやかつて長寿を期待したい。

# 野に咲く「野生の思考」

竹内 信夫  
(たけうち のぶお)

東京大学名誉教授

一九七三年秋一〇月、パリ。二八歳の私は文学研究の留学生としてその地に住むようになっていた。「五月革命」の余燼は消えていたが、それでもパリには軽やかな解放感が漂っていた。

そのパリにクロード・レヴィ=ストロースもいた。今から思えば、その人は当時すでに六五歳。そしてその年に、彼はアカデミー・フランセーズの会員になる。「神話論理」も既に二年前の一九七一年には全四巻の刊行が完了していた。



ひっそりと野に咲くパンジー

当時は「構造主義」なる一種の熱病が流行していた時代で、私の留学生仲間にも感染者は多かった。レヴィ=ストロースもその頭目の一人と目されていて、日本語の翻訳が出されたばかりの『構造人類学』が盛んに議論されていた。「野生の思考」に収められたサルトル批判などもホットな話題であつた。

パリ留学生サークルでの議論を通じて、私はレヴィ=ストロースに関心を持つようになった。そして『野生の思考』を読んだ。人間の思考の基底に潜在する普遍構造であり、現代人の日常生活にも潜む「野生の思考」という考えにひどく惹かれた。と同時に、それを表現するこの人類学者の文章の巧みさにも魅了された。

レヴィ=ストロースの思考の根底にあるものは何だろうか? 答えはさまざまであろう。人類学的内容だけに向かう読みは表層を撫でて、その文章を捨てる。論語読みの論語知らずの愚である、と私は思う。知識は乗り越えられやがて忘れられるだろうが、「野生の思考」すなわち「野生のパンジー」(フランス語で pensee sauvage、同時にこの二つを意味する)は人々の心に咲き続けるだろう。

この「野生のパンジー」の放つ芳香の源を辿れば、自己中心の優越意識が平等の名において偽装するあらゆる差別と支配への拒否に行き着く。それが思想的に醸され、芸術的表現をまもつて、すべての人間の、すべての存在の絶対的平等を主張する「野生の思考」として香り出るのである。

# 特集 今日のレヴィ=ストロース